



が、別伝の或本では建の名が最初にかかげられている。さらに、もう一つの或本では、母の名がチヌノイラツメ(遠智娘の別名とされている)とされる中で、建の名がないのである。天智の時代は書紀完成の年(720年)からはわずか半世紀前のことなのに、こういう異伝がある。

それゆえ、関氏は、建は天智の子なのか、この世に存在しなかったのか、だれか他の人の子だったかも知れないということになると指摘する。これは、紀が何らかの改竄をやったのではないか、建は斉明の息子だったのではないかともいう。しかしどうだろうか。

実は天智紀の記述にはいささか問題があるらしい。これは、天智紀編纂の際に史料が十分でなかったらしく(壬申の乱で失われたか)、整理された叙述になっていないからという。それでも、50年前のことで近親者もまだ生存していたり伝承されていたであろうし、わざわざ唾であったとして本文に明記されている以上、異伝はあるにしても全くの捏造とも考えにくい。

さしたる伝承もおおげさな文飾も残していない建を架空の人物とするには説得力が弱そうに思われる。

### 建皇子有順説について

山本正志「ことばに障害がある人の歴史をさぐる」という本が2005年11月に文理閣から出版された。著者は言語聴覚士で養護学校の教員であり、国語教育学卒業ということなので、日本古典には親しんでいるのであろう。ただこの本は学術的というより、一般向けであろう。「はじめに」で著者は「ことばに障害のある人達は、あまり目立たず、自ら主張することもできず、史料はほとんど残っていません。わずかに残された史料から、ことばに障害のある人達が日本の文化ではどのように受け入れられてきたかを探っていきたいと思います」と述べている。この本の中にタケル

ノミコ(建)の記述がある(p. 41-57)。その部分に限り以下に要旨を紹介しつつコメントしたい。

冒頭で著者は、資料は日本書紀に限られているので、その制約を踏まえて分析すると述べる。その制約には自覚的であるべきだろう。

次に、天智の家族を紹介、建については、例の一文を紹介している。

其三曰建皇子唾不能語

「唾」がどういう状態だったか、何も書かれていないが、「ここを出発点に、ものが言えなかった皇子の、生きた証をさがしていきます」とする。

まず出生期については、建が生まれた年に母は夫(中大兄)と父の争いによる心労の結果で亡くなったと推測、産後の肥立ちが悪かったのではないかとする。周産期環境は、朝廷中枢であるにもかかわらず、あまりよくなかったとしている。それは当たっているだろうが、ただし建の母が本当は誰であったか、今となっては多分に不明とするしかないだろう。ここに関氏の架空説が生じる余地があるわけである。

その後どのように育ったかはわからない。次に出てくるのは死んだときである。

皇孫建王年八歳にして薨せましぬ

さらに、「天皇(斉明)、もとより皇孫の有順なるをもって、ことにあがめたまふ」ほどであったから悲嘆は大きかったというわけで、この後に斉明女帝の歌が続く。斉明は早世した孫をかわいく思っていたであろう。ただしそれは、建が有順(みさおか)、つまり上品だったから「あがめたまふ」つまり大切にされたのだろう、と。こうした一連の記述について、著者は言う。

そもそも「日本書紀」は朝廷内の政治むきのことを記す国史であり、唐・新羅などとの外交関係や、蝦夷の征伐、各地豪族からの朝貢のことが多く書かれています。そうした中

でタケルノミコのことをこれほど多く記しているのも、尋常ではありません(p. 55)。

とし、姉である持統天皇の意向が大きかったのではと推測している。

まとめとして、「唾」ではあったが、どんな障害だったかはわからない、早々と母を無くしたうえに、8歳で夭折したということであれば不幸な子どものように聞こえるとする。しかし、「唾」であっても祟りがあったという記載はなく、大切に育てられ躰けもされていたのではと解釈している。

最後に言う。

・・・そうした子どものことを国史に記載させる必然性は全くありません。それでもタケルノミコのことをその障害も含めて、正直に記録に残したということは、「唾」であったことも含めてその人となり大切にされていたからではと思います。(p. 57)

しかしこれは本人も述べるように「好意的な解釈」(p. 56)に過ぎないだろうと当方も思う。

#### ここまでのまとめ

建のことが書紀に記載されたのはなぜか、広島大会で発表したことと合わせてまとめておこう。

まず、出雲の神の祟りがあることの反映として記載されたというもの。古事記を援用しての説であり、学界ではなんとなくこれが通説のように扱われているらしい。しかし、山本氏が指摘するように(p. 53)、書紀には「神の祟りでものが言いえなかった、という障害観は出てきません。」ここに難点がある。

次に架空説であるが、先に見たように、書紀自体の信憑性は疑わしいにしても架空と断定するには、今ひとつ説得力に乏しい。

それから、山本氏が言う有順説。上品な人となり大切にされたから、あるいは、近親

である持統の意向により記録されたからというわけであるが、あまたいる皇子のなかで、夭折した建を特筆大書した理由としては、これまた説得力に欠けるように思う。

ここでついでに、津名道代氏による説(「難聴：知られざる人間風景 下 日本史に探る聴覚障害者群像」 文理閣, 2005. 7)も紹介しておく。なお、津名氏は日本思想史専攻である。彼女は言う、「その立場上[天皇の子ども]、古代でただ一人、正史に名をとどめた実在の「聾唾」の子。その背後にはむろん、名もなく・言葉なく、かげろうのように消えていった幾万人もの男女の民衆同障害者がいた。その象徴としてのタケルである。・・・」と。象徴説といえるであろう。なお、津名氏の本は、歴史随筆と言う形であるが、一読を勧めたい。

ただ、山本、津名両氏とも、随筆風の書き方のせいか、思い入れが強いように感じる。

そして、当方が提起した、大海人後継正当化説である。天智にはふさわしい後継者がいなかったことの例証として、天智の嫡男の建を記載し、弟の天武即位は当然であると書紀の編者は考えた、というものである。状況判断に基づく推論であり、直接の傍証がないのが弱いところである。

いずれにしても、定説というのはまだない、と言える。読者のご批判を御願ひしたい。